

## 『源氏物語』 「夕霧」 巻に見られる対照的描写

著者	福永 佳子
雑誌名	清心語文
号	5
ページ	22-30
発行年	2003-08
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000306/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000306/</a>

## 『源氏物語』「夕霧」巻に見られる対照的描写

福 永 佳 子

てみたい。

### 二

『源氏物語』「夕霧」巻は、「まめ人」夕霧の不慣れな恋の顛末と、それを取り巻く人々の動向が語られる巻であり、「若菜上」巻から続く女三宮の降嫁、柏木と女三宮との密通、柏木の死といった暗く悲しい出来事の後日談と考えられる。この「夕霧」巻が、『源氏物語』全体の筋の上でどの流れに位置づけられるかということについては諸説あり<sup>①</sup>言及を要する問題であると考えられるが、ここでは省略し、稿を改めて考察することにした。

夕霧の落葉宮への思慕が主に語られる「夕霧」巻には、しばしば対照的な描写が見られる。比較や対照を用いて物語を展開させる方法は『源氏物語』によく用いられているものである<sup>②</sup>が、「夕霧」巻にはそれが顕著であるということができるだろう。本稿では、「夕霧」巻において大きな特徴となっているこの対照的な描写について、その場所（都）と（小野）の山里）と人物（雲居雁と落葉宮）に注目して考え

『源氏物語』の世界で見られる対照は、源氏と頭中将、夕霧と柏木、薫と匂宮というように人物におけるものが中心である<sup>③</sup>。主要な人物には、肩を並べ比較される人物が設定され、それぞれの方面からの描写が試みられている。問題にしている「夕霧」巻で、主として対照関係にあるのは、雲居雁と落葉宮である。雲居雁は、夕霧の幼恋の相手で、「藤裏葉」巻でその想いを果たして夕霧の北の方になる人物である。落葉宮は、「柏木」巻で夫である柏木を亡くした後、夕霧の懸想を受けるようになる人物である。「夕霧」巻では、夕霧が関わる二人の女君を対極に置いて、そこに展開される対照を描き出していると考えられる。

雲居雁側と落葉宮側の状況が端的に表された箇所を次に見てみる。

① 秋の夕べのものあはれなるに、一条宮を思ひやりきこえたまひ

て渡りたまへり。うちとけしめやかに御琴なども弾きたまふほどなるべし。深くもえとりやらで、やがてその南の廂に入れたてまつりたまへり。端つ方なりける人のみぎり入りつるけはひどもしるく、衣の音なひも、おほかたの匂ひ香ばしく、心にくきほどなり。例の御息所対面したまひて、昔の物語ども聞こえかはしたまふ。わが御殿の、明け暮れ人繁くても騒がしく、幼き君たちなどすだきあわてたまふにならひたまひて、いと静かにもあはれなり。うち荒れたる心地すれど、あてに気高く住みなしたまひて、前栽の花ども、虫の音しげき野辺と乱れたる夕映えを見わたしたまふ。〔横笛〕卷 三五二―三五三頁

② 君たちの、いはけなく寝おびれたるけはひなどこかしこにうちちして、女房もさしこみて臥したる。人げにぎははしきに、ありつる所のありさま思ひあはするに、多く変りたり。〔横笛〕卷

三五八―三五九頁

これらは「横笛」卷に見られる夕霧の視点による描写である。双方の女君と関わる夕霧の感想という形で、それぞれの住居の状態が語られている。「一条宮」というのは、一条御息所と落葉宮母娘が生活する邸である。前年に柏木を亡くした邸は、人の気配があまりなく、静かでもの寂しい空気に包まれている。人々がかすかに動く普通なら何にかき消されてしまうような音が、耳に入ってくるのは静寂な証拠であると考えられる。生活の音、そして生活感を感じさせない一条宮の有様は、夕霧の心に強く印象づけられたに違いない。①の後半と②に描

かれる自邸との比較にその思いは表れていると思われる。この部分から夕霧の自邸である三条殿の有様が、一条宮のそれとは正反対であったことが分かる。三条殿は、夕霧の正妻雲居雁と多くの子供が住んでいる邸で、常に人の影が絶えない騒がしい所として描写されている。①で、群がる・集まるなどの意味を持つ「すだく」が用いられていることから、三条殿の邸がいかに賑やかであったかが推測できるだろう。このように両者の違いは明らかであるが、やはりそれは人の数に起因していると考えられる。「夕霧」卷は、ここにあげた「横笛」卷の延長で、雲居雁側の様子と、落葉宮側の様子とを交互に描く方法が進められている。

### 三

「夕霧」卷の物語が展開する主要な地は、六条院と三条殿や一条宮がある〈都〉と、一条御息所の山荘がある〈小野〉の山里の二つに分けられる。『源氏物語』の舞台は、主として〈都〉であり、ここにおいてなされた前者の場所設定に無理な点はないと思われる。それとは対照的に後者の〈小野〉の山里は、続編の宇治十帖を除いては他に見ることはできない。つまり、〈小野〉は、『源氏物語』正編の終わり近くにある「夕霧」卷でにわかに扱われるようになった地なのである。

〈小野〉の山里は、もともと身体が丈夫でない上に、物の怪にも悩まされていた一条御息所が、律師による加持祈祷を受けるために移っ

た所として物語に出てくる。その御息所に、夫の柏木を亡くした落葉宮も同行し、悲嘆に暮れる母娘の〈小野〉での生活は始まるのである。『和名類聚抄』<sup>〔註4〕</sup>において「愛宕郡小野郷」と説明される〈小野〉は、比叡山に籠る僧の往来が許される地であつたとされる。聖と俗の境に位置するこの山里は、宗教的な趣を感じさせる地として描かれている。ここで、〈小野〉の山里が、当時どのように捉えられていたのか、〔夕霧〕巻と古注以来関わりが指摘されてきた『伊勢物語』『うつほ物語』の用例から探つてみたい。

i 　むかし、水無瀬に通ひたまひし惟喬の親王、例の狩しにおはします供に、馬の頭なるおきな仕うまつれり。日ごろ経て、宮にかへりたまうけり。御おくりしてとくいなむと思ふに、大御酒たまひ、祿たまはむとて、つかはさざりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくにとよみける。時は三月のつごもりなりけり。親王おほとのごもらで明かしたまうてけり。かくしつづまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御ぐしおろしたまうてけり。正月におがみたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いと高し。しひて御室にまうでておがみたてまつるに、つれづれといともの悲しくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひいで聞えけり。さてもさぶらひてしがなと思へど、おほやけごとどもありければ、えさぶらはで、夕暮にか

へるとて、

忘れては夢かと思ふおもひきや雪ふみわけて君を見むとはとてなむ泣く泣く来にける。〔伊勢物語〕八三段 二〇五―二〇六頁<sup>〔註5〕</sup>

ii 　かくて、このおとど、いもひ、精進をして経たまふほどに、山里の心細げなる殿設けたまひてぞ住みたまひける。そのわたりは、比叡の坂本、小野のわたり、音羽川近くて、滝の音、水の声あはれに聞こゆるところなり。もの思はぬ人だに、もの心細げなるわたりなり。ましていみじき心地してなむ経たまひける。〔うつほ物語〕「忠こそ」 二五〇頁<sup>〔註6〕</sup>

iii 　宰相も、参りにしよし聞き果てて、不用になりにければ、夜のうちに、坂本に、小野といふ家に来て、大願立て、よろづの神仏に祈りて、泣き焦がれつつ惑ひたまひければ、からうして生きたれどありしやうにもあらず、宮仕へもせで、ただつれづれとあり経れど、悲しく覚ゆれば、小野より、兵衛の君のもとに、かく聞こえたり。

「かくばかり消ゆるわが身に年を経て燃ゆる思ひの絶えずもあるかな

いづれの世にか思うたまへ慰めむ。あないみじや」と聞こえたり。あて宮見たまひて、あはれと思せど、ものものたまはず。〔うつほ物語〕「あて宮」 一四〇―一四一頁<sup>〔註7〕</sup>

『伊勢物語』の〈小野〉は、春宮になることができなかった失意から出

家した惟喬の親王が籠った場所として設定されている。また、『うつば物語』では、iiのように、橘千蔭が息子の忠こそを疑って、出家に迫いやってしまった過去を悔やんで籠った所として、さらに、iiiのように、あて宮への想いがかなわず、精神に異常を来した実忠を父の源季明が療養目的で連れていった場所として、『小野』は物語に出てきている。『文学遺跡辞典』<sup>〔注〕</sup>において、「幽棲にふさわしい閑寂清冷の地」と説明される『小野』は、当時、何らかの理由で世をはかなく思ったり、療養が必要となったりした者が移る山里と捉えられていたのではないだろうか。さらに、こうした山里特有の閑寂な空気が、病身の者だけでなく、都の喧騒の中で生活する貴族にとっても憧れであったことは、貴族の別宅が点在していたという事実からも分かるだろう。山城国の歌枕として知られ、多くの和歌が残されている『小野』への人々の関心は、かなり高かったのではないだろうか。この地が、『夕霧』巻に使われた背景には、『小野』に対するこうした精神的風土が関わっていると考えられる。

当時の『小野』に対する見解に触れたところで、次は、『夕霧』巻における『小野』の山里の描写に注目してみたい。一条御息所と落葉宮母娘が移った『小野』の山里に夕霧が初めて訪れるのは、木々の葉が色づいた秋の盛りのころであった。

③ 八月中の十日ばかりなれば、野山のけしきもをかしきころなるに、山里のありさまのいとゆかしければ、(中略)ことに深き道ならねど、松が崎の小山の色なども、さる巖ならねど秋のけしきづ

きて、都に二なくと尽くしたる家居には、なほあはれも興もまさりてぞ見ゆるや。〔夕霧〕巻 三九七―三九八頁)

もつともその趣を感じることができる秋の盛りから『小野』での具体的な話は幕を開けている。後に「九月十余日」〔夕霧〕巻 四四七頁)とあるので、『夕霧』巻の季節は、秋の半ばから晩秋にかけてということになる。和歌の世界において、『小野』は、秋・冬の景物とともに詠まれることが多いが、その和歌的な情趣に包まれるように「夕霧」巻の季節も秋に設定されていると考えられる。③に続いて、次のような描写が見られる。

④ 日入り方になりゆくに、空のけしきもあはれに霧りわたりて、山の蔭は小暗き心地するに、蛸鳴きしきりて、垣ほに生ふる撫子のうちなびける色もをかしう見ゆ。前の前栽の花どもは、心にまかせて乱れあひたるに、水の音いと涼しげにて、山おろし心すこく、松の響き木深く聞こえわたされなどして、不断の経読む時はりて、鐘うち鳴らすに、立つ声もる代はるもひとつにあひて、いと尊く聞こゆ。所がらよろづのこと心細う見なさるるも、あはれにもの思ひつづけらる。出でたまはる心地もなし。律師も、加持する音して、陀羅尼いと尊く読むなり。〔夕霧〕巻 四〇一―四〇二頁)

自然に囲まれた山荘の外部の風景と、宗教色に彩られた内部の様子との描写により、祈禱の声と自然が織りなす音のみの寂寥とした世界が強調されている。空・霧・蛸・撫子・松といった和歌に詠まれる景物

が次々に描写されていることは注目するべきだろう。具体的な引用は省略するが、「夕霧」巻には、このように和歌の世界で用いられる景物や、和歌的な表現がしばしば見られる。また、④では次のような『古今和歌集』<sup>〔五〕</sup>の歌が、引歌として指摘されている。

ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞあり  
ける 〔古今 秋上 二〇四 よみ人しらず〕

あなこひし今も見てしか山がつかきほにさける山となでしこ

〔古今 恋四 六九五 よみ人しらず〕

④は、和歌の景物や引歌を効果的に取り入れ、実際の描写以上の効果を得ている箇所であると考えられる。作者はこうした効果を視野に入れて、「小野」の山里を「夕霧」巻の場に設定したのではないだろうか。この後さらに続く描写も「小野」の山里の風景と、人々の心情とが響き合ったものになっているが、このような風景と心情とを響き合わせる方法は、和歌の表現に由来するものであると思われる。物語世界が和歌的な情趣で彩られていると言っても過言ではないだろう。

#### 四

先に述べたように、一条御息所と落葉宮が移った「小野」の山里は、隠棲に適した寂寞たる地であり、また和歌的な情趣の溢れた所でもあった。景色の描写が豊かで風情があるという点については、①の一条宮の場面でも同様の指摘が可能だろう。また、人の少なさは、「都」に

あつても「小野」にあつても相違はない。落葉宮は、物語の中で、「都」↓「小野」↓「都」という移動を見せるが、取り巻く状況はほとんど変わらない。むしろ、夫と母を相次いで亡くしているので、その周囲はさらに寂しくなったと言ふことができるのではないだろうか。このように人影のなさを強く感じさせる落葉宮の周囲とは逆に、雲居雁側では常に人の多さが強調されている。①②において出てきた子供の姿は、その後もたびたび物語中に見られる。

⑤北の方は、かかる御歩きのけしきはの聞きて、心やましと聞きゐたまへるに、知らぬやうに君達もてあそび紛らはしつゝ、わが昼の御座に臥したまへり。〔夕霧〕巻 四二六―四二七頁

⑥女君は、君達におどろかされて、ゐざり出でたまふにぞ、我も今起きたまふやうにてよろづにうかがひたまへど、え見つけたまはず。女は、かく求めむとも思ひたまへらぬをぞ、げに懸想なき御文なりけりと心にも入れねば、君達のあわて遊びあひて、雛つくり拾ひ据ゑて遊びたまふ、文読み手習など、さまざまにいとあわたし、小さき児這ひかかり引きしろへば、取りし文のことも思ひ出でたまはず。〔夕霧〕巻 四三〇頁

⑦日たけて、殿には渡りたまへり。入りたまふより、若君たちすぎきうつくしげにて、まづはれ遊びたまふ。〔夕霧〕巻 四七二頁

常に子供の存在を感じさせる三条殿の邸は、それによってより生活感を増していると考えられる。この時、夕霧と雲居雁夫婦に七、八人の

子供がいることは、一条御息所の加持祈禱をしていた律師によって明かされている。また、「夕霧」巻の末尾部分にも、重ねて子供についての記述が見られる。「少女」巻から語られる幼恋を「藤裏葉」巻で実らせ、手本にするべき仲とまで賞賛された夫婦にとって、子供に囲まれた賑やかで活気に溢れた生活は、「日常」のものであったのである。そうした「日常」に慣れた夕霧が、思いがけず足を踏み入れたのが、落葉宮側の「非日常」の世界であった。親友の柏木から亡き後のことを託され、一条御息所と落葉宮母娘の後見として生活の面倒を見るうちに、夕霧は落葉宮を思慕するようになり、その想いをほめめかすようになる。

⑧ 月さし出でて曇りなき空に、翼うちかはす雁がねも列を離れぬ、  
うらやましく聞きたまふらんかし、風肌寒く、ものあはれなるに  
さそはれて、箏の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き  
声なるに、いとど心とまりはてて、なかなか思はゆれば、琵琶  
を取り寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。「思ひお  
よび顔なるはかたはらいたけれど、これは言問はせたまふべくや」  
とて、切に簾の内をそそのかしきこえたまへど、ましてつつまし  
きさし答えなれば、

言に出でていはぬもいふにまさるとは人に恥ぢたるけしきを  
ぞ見る

と聞こえたまふに、ただ末つ方をいささか弾きたまふ。

深き夜のあはればかりは聞きわけどことよりほかにえやは言

ひける

飽かずをかしきほどに、さるおほどかなる物の音がらに、古き人の心しめて弾き伝へける、同じ調べのものといへど、あはれに心すきものの、かたはしを掻き鳴らしてやみたまひぬれば、恨めしきまでおぼゆれど、「すきすきしさを、さまざまに弾き出ても御覧ぜられぬるかな。秋の夜更かしはべらんも昔の咎めやと憚りてなむ、まかではべりぬべかめる。また、ことさらに心してなむさぶらふべきを、この御琴どもの調べ変へず待たせたまはんや。ひき違ふこともはべりぬべき世なれば、うしろめたくこそ」など、まほにはあらねど、うちにははしおきて出でたまふ。「横笛」

巻 三五四―三五六頁

これは①に続くところで、琴や琵琶の音が聞こえるだけの一条宮の静かな様子が描かれている場面である。かすかな楽の音と交わされる歌の贈答に、夕霧は自らが生活する日常にない風流な空気を感じただろう。三条殿では、⑤などにあげたように、雲居雁が子供の世話で風流事に縁遠くなっているため、夕霧は自邸で風流な空気を味わうことはできない。それは、夫婦の文の贈答にも表れている。

⑨ 女君、なほこの御仲のけしきを、いかなるにかありけむ、御息所とこそ文通はしもこまやかにしたまふめりしか、など思ひえ難くて、夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに、若君して奉れたまへる、はかなき紙の端に、

「あはれをいかに知りてかなぐさめむあるや恋しき亡きや悲



しき

おほかなきこそ心憂けれ」とあれば、ほほ笑みて、さまざま  
かく思ひよりてのたまふ、似げなの亡きがよそへや、と思す。い  
ととく、ことなしびに、

「いづれと分きてながめん消えかへる露も草葉の上と見ぬ世  
を

おほかたにこそ悲しけれ」と書いたまへり。〔夕霧〕巻 四四六  
（四四七頁）

築き上げた穏やかな「日常」の中で生活する雲居雁にとつて、文に氣  
を遣うことはなかったのだろう。それは、文の贈答にこれといったこ  
とのない紙を用いたり、子供を使者にしたりする姿に表れていると思  
われる。耳に入ってくる噂に心を痛め、その真意を確かめようとする  
が、深刻に捉えなかった夕霧に簡単にかわされてしまうのである。楽  
の音が絶え、文にすら氣を遣わなくなった「日常」の中に身を置いて  
いた夕霧を落葉宮のもとへ向かわせたのは、自邸とは対照的な風流な  
空氣であつたのかもしれない。その落葉宮の文については、次のよう  
に評されている。

⑩宮ぞ御返り聞こえたまふ。いとをかしげにてただ一行などおほど  
かなる書きざま、言葉もなつかしきところ書き添へたまへるを、  
いよいよ見まほしう目とまりて、しげう聞こえ通ひたまふ。〔夕  
霧〕巻 三九七頁

文だけを取りあげてみても両者は対照的であるが、さらにそれぞれ

の女君の風貌や言動にも大きな違いが見られる。まずは、落葉宮の風  
貌の描写に注目してみる。

⑪人の御ありさまの、なつかしうあてになまめいたまへること、さ  
はいへどことに見ゆ。世とともにものを思ひたまふけにや、痩せ  
瘦せにあえかなる心地して、うちとけたまへるままの御袖のあた  
りもなよびかに、け近うしみたる匂ひなど、とり集めてらうたげ  
に、やはらかなる心地したまへり。〔夕霧〕巻 四〇七頁

⑫浅はかなる廂の軒はほどもなき心地すれば、月の顔に向かひたる  
やうなる、あやしうはしたなくて、紛らはしたまへるもてなしな  
ど、いはむ方なくなまめきたまへり。〔夕霧〕巻 四一〇頁

⑬いとあてに女しう、なまめいたるけはひしたまへり。〔夕霧〕巻  
四八〇頁

上品さや優雅さを感じさせる「なまめく」をもつて形容されているこ  
とは注目するべき点だろう。いずれも夕霧の目に映つたものであるが、  
物思いを重ねて瘦せていても、どこか品性を感じさせる落葉宮の姿は  
新鮮であつたと考えられる。一方、雲居雁は次のように描写されてい  
る。

⑭この君いたく泣きたまひて、つだみなどしたまへば、乳母も起  
き騒ぎ、上も御殿油近く取り寄せさせたまで、耳はさみしてそそ  
くりつくるひて、抱きてあたまへり。いとよく肥えて、つぶつぶ  
とをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ。〔横笛〕巻 三  
六〇頁



雲居雁は、落葉宮とは対照的に、ふくよかな姿に描写されている。また、泣いている子供をあやすために、当時、はしたない行為とされていた「耳はさみ」をしているのである。多くの子供の母親になっているとはいえ、女君のこうした姿は、落葉宮の奥ゆかしい有様を見た夕霧の目にどのように映っただろうか。

また、「ものづつみをいたうしたまふ本性に、際々しうのたまひさはやぐべきにもあらねば」(「夕霧」巻 四二三頁)とされる落葉宮の内に秘める内向的な性格とは対照的に、雲居雁は思ったことを口に出すはつきりした性格に描かれている。そのため、引用は省略するが、夕霧と雲居雁夫婦の間には会話が多い。雲居雁にとって、夕霧の落葉宮への恋は、安定した夫婦関係や穏やかな「日常」をおびやかす、かなり深刻なものであったに違いない。『源氏物語絵巻』に描かれたことで有名な文を奪ったり、恨み言を並べたりする雲居雁の行為は、そうした危機から生活を守ろうとする策であったのだろう。しかし、夕霧にはうまくはぐらかされたり、なだめすかされたりするのだから、雲居雁にとって、この一連の出来事は悲劇以外の何ものでもなかったのである。しかも、夕霧は、その切実な思いを受け止めないばかりか、雲居雁のことを「鬼しうはべるさがなもの」(「夕霧」巻 四七〇頁)とまで言っている。「夕霧」巻で見られる夕霧と雲居雁との言い争いの様子は、『源氏物語』の中でもあまり例がない、珍しいものである。

⑮ 「略」 おいらかに死にたまひね。まろも死なむ。見れば憎し、聞けば愛敬なし、見棄てて死なむはうしろめたし」(「夕霧」巻 四

### 七三頁)

などと、必死に言葉投げかける雲居雁と、その姿をかわいらしいと笑い、冗談交じりに軽くあしらう夕霧との愛憎入り交じった会話にはどこか余裕があり、時に滑稽なものささめ感じさせる。これは、置かれた立場の違いによるものであると考えられるが、そこには、一種の喜劇性を見出すことができるだろう。雲居雁側から見ると悲劇でしかないことが、違う立場から見ると喜劇的に捉えられるのである。ここにも一つの対照を見出せるのではないだろうか。

## 五

以上、「夕霧」巻に見られる対照的な描写について、場所と人物の観点から考えた。雲居雁側の描写を見ると、文章が非常に長く、その世界は説明的、あるいは散文的であると指摘できるだろう。また、周囲の状況から、そこが喜劇的な世界であることにも気付かされる。逆に、落葉宮を取り巻く世界は、抒情的かつ悲劇的であると指摘できるだろう。こうした二人の女君を取り巻く対照的な状況は、夕霧の思いがけない恋の展開する背景として効果的に作用していると考えられる。対照的な描写が随所に見られる「夕霧」巻の世界は、相反する設定および表現がうまく生かされて成り立っており、そこに源氏を中心とした物語との違いも表れていると思われるのである。

本稿では、その描写の割合が著しい「夕霧」巻のみを対象にして考

察を進めたが、すでに指摘されているように、比較や対照を用いた描写は、他の巻々にも見られる。今後は、『源氏物語』の特徴的な表現技法であるこの対照的な描写について、さらに他の巻々に見られるものも視野に入れて考察していきたい。

\*『源氏物語』の引用本文および頁数は、新編日本古典文学全集『源氏物語』（小学館）による。

注1 藤村潔『源氏物語夕霧の巻試論』（『国語』一七号 昭和三九年一月）

石田穰二『夕霧の巻について』（『学苑』三一三号 昭和四一年一月）

伊藤博『源氏物語の原点』（昭和五五年一月 明治書院）

島津忠夫『夕霧から御法・幻へ——源氏物語終結に働いた作者の意図をめぐって——』（『中古文学』第三五号 昭和六〇年五月）

2 森岡常夫『源氏物語の研究』（昭和四二年一月 清水弘文堂書房）

森岡常夫『源氏物語の考究』（昭和五八年六月 風間書房）

3 注2に同じ。

4 京都大学文学部国語学国文学研究室編著 諸本集成『和名類聚抄』本文篇（昭和四三年七月 臨川書店）

5 引用本文および頁数は、日本古典文学全集『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（昭和四七年十二月 小学館）による。

6 引用本文および頁数は、新編日本古典文学全集『うつほ物語』①（平成一年六月 小学館）による。

7 引用本文および頁数は、新編日本古典文学全集『うつほ物語』②（平成一三年五月 小学館）による。

8 竹下数馬『文学遺跡辞典』（詩歌編）（昭和四三年五月 東京堂出版）

竹下数馬『文学遺跡辞典』（散文編）（昭和四六年九月 東京堂出版）

9 「新編国歌大観」編集委員会編著『新編国歌大観』（角川書店）による。

（ふくなが よしこ／博士後期課程一年在籍）